

日英語の否定対極表現と否定構造をめぐる一考察

田中 宏明

国立大学法人高知大学人文学部
国際社会コミュニケーション学科 英語学研究室

Negative Polarity Items in Japanese and English: A Comparative Study of the Syntactic Structure of Negation

Hiroaki TANAKA

*English Linguistics Department at Cross-Cultural Communication, Faculty of Humanities
Kochi University*

Abstract

This paper is eagerly concerned with the syntactic comparison of negative polarity items (NPIs) in Japanese and English with the intention of making clear the syntactic structure of negation. After a brief look at some behavioral differences between NPIs in Japanese and English, we will see how Japanese NPIs are licensed, which will surprisingly make a keen contrast with the way English NPIs are licensed. To be more specific, it is to be shown that NPIs in Japanese are licensed in Spec, NegP via Spec-head agreement, while NPIs in English are licensed by being within the scope of negation.

Keywords: 否定対極表現 (negative polarity item (NPI))、否定構造 (structure of negation)、ever、分離 IP 仮説 (the Split-INFL Hypothesis)、言語の対照的研究

構成 (Contents)

1. 序論
2. 日本語の否定対極表現
3. 日英語の否定対極表現の相違
4. 日本語の否定構造
5. 結語

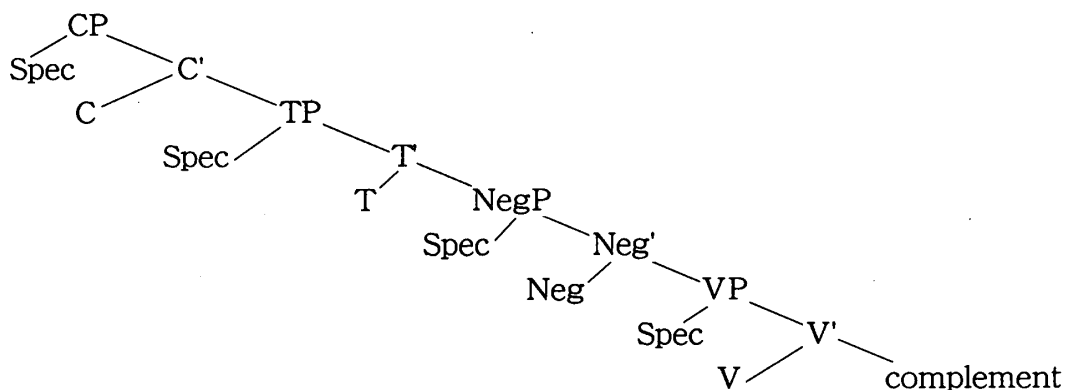
註 (Notes)

参考文献 (References)

1. 序論

否定に関する諸問題は、古くはイエスペルセン (Jespersen (1917)) が、多重否定 (multiple negation)、文否定・構成素否定 (sentential and constituent negation) 等の問題を考察し、さらには、諸言語の否定現象を「イエスペルセンの循環 (Jespersen's cycle)」として提案するなど、伝統文法の時代から言語学者の熱烈な注目を集めて来た統語論的・意味論的現象である。また Klima (1964) は、伝統文法から生成文法 (Generative Grammar) への橋渡しの役割を果たした否定研究として著名である。これらの先行研究を受け継ぎ、生成文法の時代になると否定研究は飛躍的發展を遂げることとなる。特に重要なのは、Emonds (1978), Pollock (1989, 1997) らによって提唱された「分離 IP 仮説 (the Split-INFL Hypothesis)」で、IP を TP、AgrP などの複数の機能範疇から成り立つ複合体と仮定することにより諸言語の基本的統語構造を同一とみなし、動詞の移動距離の差により実際の言語間の相違が生じるのだと主張した。¹ その際に明らかになったのが、INFL 内の否定に関する機能範疇の存在、つまり NegP という投射の存在である。この NegP の存在を仮定することにより、それ以前に比べ諸言語の否定現象を格段により統一的・明示的に扱うことが可能となった。本論ではまずこの分離 IP 仮説に基づき、以下の統語構造を前提とする。

(1)



さらに否定対極表現 (negative polarity item) に関しては、生成文法 (Generative Grammar) の枠内では、数多くの論考 (cf. Ladusaw (1979), Linebarger (1987), Progovac (1994), Acquaviva (1997), Zanuttini (1997), Tovena (1998) 等) が成されてきたが、日本語の否定対極表現を詳細に検討した論考は数少ないのが現状である。本論では、日本語における否定文の構造並びに否定対極表現の認可条件 (licensing condition) の問題を考察していくが、議論の枠組みは主としてミニマリスト統語論及び普遍的基底仮説である。² 日本語では表層において否定要素 NEG が文末 (に近い位置) に現れるという顕著な特色があるので、英語などの言語において通例考えられているような NEG の作用域 (scope) 内での否定対極表現の認可構造は、そのままでは当然不可能である。従って本論では、その問題の解決を目指すこととする。

2. 日本語の否定対極表現

本節では日本語の否定対極表現の実例を概観する。以下に掲げる否定対極表現と Neg との位置

関係に着目したい。

(2) 決して

a. 決してチャンネルを触るな!!

Neg

b. 決して現在の地位にうぬぼれることなく、さらなる飛躍を目指したい

Neg

(3) まったく／全く

a. 太郎が今どこにいるのか全く見当がつかない

b. この3日間全く食べていない

(4) かいもく／皆目

a. 花子が今何をしているのかかいもく見当もつかない

b. 彼の行方はかいもく知れない

(5) いっさい／一切

a. ここではいっさいしゃべるな

b. いっさい連絡をとらないで欲しい

c. いっさい手を出す事を禁じます

(6) ゆめ

a. ゆめわするなかれ!

b. ゆめ食べるなかれ!

(7) ぜったい／絶対

a. 絶対言えない暗い話

b. 絶対失敗しない方法があれば、こっちが知りたい

(8) ぜったいに／絶対に

a. あのスピードには絶対に追いつけない

b. 絶対に越えてはならない最後の一線

(9) とても

a. とてもそんな事はできない

b. こんな真冬にとても山には登れない

(10) よう³

a. よう言わん

b. ようやらん

- (11) およそ
a. およそ関連しない分野
b. この学部学科には、およそ教授と呼ぶにふさわしくない人物が多過ぎる
- (12) みじんも／微塵も
a. 愛なんてみじんも感じない
b. 大震災の後、我が家の形はみじんもなかった
- (13) かけらも／かけらほども
a. 博士論文なんてまだかけらもできていないのです
b. 試験勉強はかけらほどもしてません
- (14) ひとかけらの
a. かつてあれほどまでに大好きだった人だけれど、今はもうひとかけらの愛も残っていない
b. あのけんか以来ひとかけらの友情も感じない
- (15) いっぺんの／一片の
a. 今の学部学科の上層部に対しては、一片の信頼も置けない
b. 心に一片の曇りもなく
- (16) よもや
a. よもや事故にあうとは思わなかった
b. 私の昔の恩義をよもや忘れたのではないでしょうね
- (17) 夢にも
a. ここでお会いするとは夢にも思いませんでした
b. 初恋の人との再会は夢にもかなわなかった
- (18) 断じて
a. 私は断じて不正などしていない。
b. ピーターとは17年の付き合いがあるが、酔っ払って手がつけられなくなったところなど、見たことがないし、ドラッグなど断じてやっていない。
(meantime E-Zine, Vol.230 (<http://www.meantime-jp.com/>))
c. 「Sometimes」は歴史的名曲だと思いますが、断じてブリトニー・ファンではありませんので。
(meantime E-Zine, Vol.134 (<http://www.meantime-jp.com/>))
d. とは云え、私なら決してあんなに乱暴はしないね、断じて断じて。
(『クリスマス・カロール』岩波文庫、岩波書店
(青空文庫作成ファイル (<http://www.aozora.gr.jp/>)))
- (19) こんりんざい／金輪際
a. 煙草を吸うのはこんりんざいやめにしてくれ
b. こんりんざいサイクルレースには出ないと誓った

(20) もうとう/毛頭

- a. そんなつもりは毛頭ない (『広辞苑 (電子辞書辞版)』)
 b. これだけの規模のテニストーナメントで優勝するなどという気は毛頭なく、ただ自分の力を試したいだけだった。
 c. あなたを個人的に侮辱する気など毛頭ない (『和英辞郎 ver. 79』)

3. 日英語の否定対極表現の相違

前節で概観したように日本語では否定対極表現が否定に先行する。これは英語の場合と顕著な対立を成す。以下に掲げる例において、英語の否定対極表現 *ever* と *Neg* との位置関係に着目したい。

(21) 英語の否定対極表現 *ever* の諸相

- a. **No** umpire in their right mind will ever make that call.
 (http://sportsillustrated.cnn.com/tennis/2001/us_open/)
 b. **no** dancer will ever tread so lightly
 c. "I **don't** want him to ever know. Do you understand?" "Mum's the word." 『例示郎 ver.79』
 d. I do **not** plan ever to stay here again.
 e. They were **unwilling** ever to accept our help. (Quirk et al. (1985))
 f. Your wife says that **nothing** you can do will ever induce her to divorce you. She's quite made up her mind. (William Somerset Maugham, *The Moon and Sixpence* (the Project Gutenberg Edition))
 g. You are **never** second. Ever! (movie script: *The Sixth Sense*)

つまり英語の場合は、否定の作用域内に否定対極表現が存在すればそれが認可されることになる。これに対して日本語では語順が逆になっているので、これをどう処理したらいいのであろうか。次節では、その問題を検討することとする。

4. 日本語の否定構造

序論で紹介された「分離 IP 仮説 (the Split-INFL Hypothesis)」をさらに大きく発展させる形で、Cinque (1999) は、以下の (22) に示すように、IP 内に多数の機能範疇の存在を仮定し、それぞれの投射内の指定辞 (specifier) 位置に副詞を置き、その主要部との間には統語論的・意味論的に極めて緊密な関係があるとした。

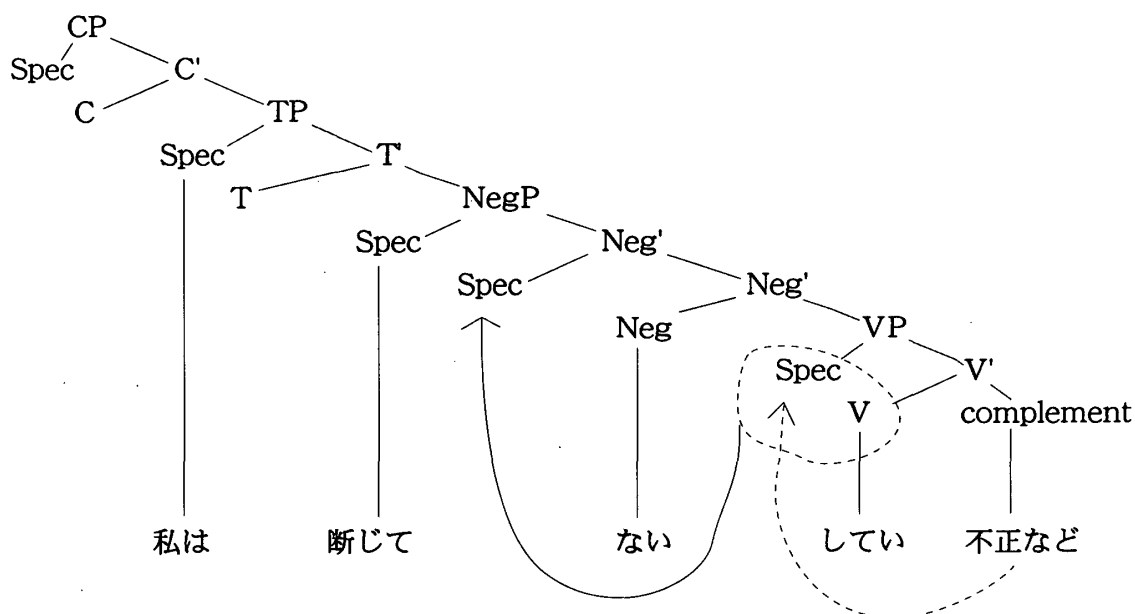
(22) 節内機能範疇の普遍的階層性 (the universal hierarchy of clausal functional projections)

[frankly Mood_{speech act} [fortunately Mood_{evaluative} [allegedly Mood_{evidential}

[*probably* Mood_{epistemic}] [*once* T (Past)] [*then* T (Future)] [*perhaps* Mood_{irrealis}] [*necessarily* Mod_{necessity}]
 [*possibly* Mod_{possibility}] [*usually* Asp_{habitual}] [*again* Asp_{repetitive(I)}] [*often* Asp_{frequentative(I)}]
 [*intentionally* Mod_{volitional}] [*quickly* Asp_{celerative(I)}] [*already* T (Anterior)] [*no longer* Asp_{terminative}]
 [*still* Asp_{continuative}] [*always* Asp_{perfect(?)}] [*just* Asp_{retrospective}] [*soon* Asp_{proximative}] [*briefly* Asp_{durative}]
 [*characteristically* (?) Asp_{generic/progressive}] [*almost* Asp_{prospective}] [*completely* Asp_{SgCompletive(I)}]
 [*tutto* Asp_{PICompletive}] [*well* Voice] [*fast / early* Asp_{celerative(II)}] [*again* Asp_{repetitive(II)}]
 [*often* Asp_{frequentative(II)}] [*completely* Asp_{SgCompletive(II)}]

本論ではこの Cinque の提案に基づき、以下の日本語の否定構造を提唱する。

(23) (= (18) a) 私は断じて不正などしていない



この構造では、否定対極表現である副詞「断じて」を NegP の指定辞 (specifier) 位置に置くことにより、否定機能範疇の主要部「ない」とその指定辞が極めて緊密な関係にあることが容易に理解される。本論で提唱する「指定辞-主要部一致 (Spec-head agreement)」による否定対極表現の認可が有効である所以である。また多重指定辞 (multiple specifiers) を仮定することにより、否定対極表現である副詞「断じて」と Neg との間に動詞要素が入ってくるのが容易に理解される。

5. 結語

本論では Cinque (1999) の提案に基づき、日本語の否定対極表現は「指定辞-主要部一致」により認可されると提唱した。これに対して *ever* のような英語の否定対極表現の場合は、否定の作用域内にあることがその認可条件となるので、その相違は極めて顕著であるといえる。

註 (Notes)

1. 特に Pollock (1989, 1997) では、副詞 (adverb) は定位置に固定されたもののみなし、これを場所的基準として動詞の移動距離を計測するという手法がとられている。

2. ミニマリスト統語論に関しては Chomsky (1995) 等を、普遍的基底仮説 (the universal base hypothesis) に関しては Kayne (1994)、Cinque (1996) 等を参照のこと。
3. この「よう」という言葉は、どちらかと言えば西日本での使用が主なようだ。

参考文献 (References)

- Alexander, Louis G. (1988) *Longman English Grammar*, Longman, London.
- Chalker, Sylvia (1990) *English Grammar Word by Word*, Nelson, Edinburgh.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1986a) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (1986b) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Cinque, Guglielmo (1996) "The Antisymmetric Programme: Theoretical and Typological Implications," *Journal of Linguistics* 32:447-464.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford University Press, Oxford.
- Culicover, Peter W. (1991) "Polarity, Inversion, and Focus in English," in *Proceedings of ESCOL 1991*, 46-68, Department of Linguistics, The Ohio State University.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- Dixon, Robert M. W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*, Clarendon Press, Oxford.
- Emonds, Joseph E. (1978) "The Verbal Complex V'-V in French," *Linguistic Inquiry* 9, 151-175.
- Hornby, A. S. (1985) *Guide to Patterns and Usage in English*, 2nd Edition, 7th Impression, Oxford University Press, London.
- Jespersen, Otto (1917) *Negation in English and Other Languages*, (Repr. 1962 in *Selected Writings of Otto Jespersen*, pp. 1-151.) Andr. Fred. Host & Son, Copenhagen.
- Jespersen, Otto (1909-49) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, George Allen & Unwin, London.

- Kadmon, Nirit and Fred Landman (1993) "Any," *Linguistics and Philosophy* 16, 353-422.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Klima, Edward S. (1964) "Negation in English," In J. Fodor and J. Katz, eds., *The Structure of Language: Readings in the Philosophy of Language*, 246-323. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Ladusaw, William A. (1979) *Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relations*, Ph.D. Dissertation, University of Texas at Austin.
- Laka, Itziar (1990) *Negation in Syntax: On the Nature of Functional Categories and Projections*, Unpublished Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge.
- Laka, Itziar (1992) "Negative Complementizers: Interclausal Licensing of Negative Polarity Items," *NELS* 22, 275-289.
- Leech, Geoffrey (1989) *An A-Z of English Grammar and Usage*, Edward Arnold, London.
- Linebarger, Marcia C. (1980) *The Grammar of Negative Polarity*, Ph. D. dissertation, MIT.
- Linebarger, Marcia C. (1987) "Negative Polarity and Grammatical Representation," *Linguistics and Philosophy* 10, 325-387.
- McCawley, James D. (1998) *The Syntactic Phenomena of English*, 2nd ed., University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Nishioka, Nobuaki (1994) "Improper Movement and Polarity Items in English and Japanese," *English Linguistics* 11, 1-28.
- Poutsma, H. (1926-29) *A Grammar of Late Modern English*, Groningen: Noordhoff.
- Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Pollock, Jean-Yves (1997) "Notes on Clause Structure," In Liliane Haegeman, ed., *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, Kluwer, Dordrecht, pp. 237-279.
- Progovac, Ljiljana (1988) *A Binding Approach to Polarity Sensitivity*, Doctoral dissertation, University of Southern California.

Progovac, Ljiljana (1993) "Negative Polarity: Entailment and Binding," *Linguistics and Philosophy* 16, 149-180.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Swan, Michael (1980) *Practical English Usage*, Oxford University Press, Oxford.

Swan, Michael (1995) *Practical English Usage*, 2nd edition, Oxford University Press.

Tovena, Lucia M. (1998) *The Fine Structure of Polarity Sensitivity* (Outstanding Dissertations in Linguistics), Garland Publishing Company, New York.

平成16年 (2004) 11月30日受理

平成16年 (2004) 12月31日発行